



Vision

「二重ラセン」から考えたこと

名古屋大学環境医学研究所神経性調節分野

水村和枝

ずいぶんあいまいな記憶なのだが、私が学生（院生？）だったときに、日本のある科学雑誌にある高名な研究者の書評（またはエッセイ）が掲載された。対象はワトソンの「二重ラセン」である。書評を書いた研究者にとって、研究とは山登りにたとえるなら、道端の草花を愛で景色を楽しみながら頂上を極める、というものであった。ところがワトソンたちのやり方はこれとはまったく違って、いかに早く、他の人に競り勝って最初に頂上に旗をたてるか、というものであるとその研究者は感じ、彼我の差に驚いていた。これは30年以上前の話である。当時このような研究姿勢はワトソンの個人的なもの、と思われていたと思う。ところがいまやワトソンたちの研究姿勢があまりひろまり、また、国の科学技術政策を決定したり実施する組織によって半ば強制されて、世はまさに「いかに早くいかに高く」到達するかの競争である。そういう姿勢を持たなければ研究費は取れない、そればかりではなく大学に存在すらできなくなりそうな勢いである。

「研究へのインセンティブは金と名誉」と、ある会合である教授が発言されて、私は啞然としてしまった。‘金’はある程度ないと研究はできないけれど、‘名誉’とならべられるような意味での‘金’が必要とは思えない、だいたい研究にそんな外的なインセンティブ（実にいやな言葉だ）が必要だというのは、どこかで道筋が違ってしまったのではないか、研究とは内在的な知識欲や夢、

また、医学研究ならば人間を病気から救いたい、というような願望に支えられたものではないのか、そうだとずっと思ってきた。今でもそうであろうと願うが、それ以上に研究者を駆り立てようというのか、「インセンティブをつける」ことがあちこちで議論されている。研究費の上乗せ、給料の増額、賞の授与等々。研究の価値を認めるから、尊敬するからというのではなく、競争させるための「えさ」である。「えさ」を目の前にぶら下げられ、そして、後ろから「評価」という電気ショックで追い立てられているのが現在の研究者の状況らしい。

この間に生理学の研究の仕方も大きく変わった。個人による職人的技術を駆使した研究から、規模の効果が大きく出るような研究方法が増え、グループによるプロジェクト志向の研究へ。以前私は、生理学研究は生理的でない、と良く思ったものだ。長い間、まるごとの個体を使って実験していたから、1回の実験は通常翌朝まで続き、ふらふらになって帰宅した。実験の準備に時間がかかるからというのが一方の理由で、また動物の命をもらうのだからできるだけたくさんの良いデータをとらなければという思いから、徹夜で実験した。でもそれは実験動物の命で規定されていて、動物の状態が悪くなれば実験は終わる。ところが最近では、とくに分子生物学関連の研究では機械が相手である。機械は24時間休みなく働ける、歯止めがない。‘早く、高く’のプレッシャーの中

で、研究者、特に若い研究者の生活がそれに支配されつつある。

科学は人間の生活を物質的ばかりでなく精神的に豊かにするものであってほしいと思う。そういうものとしての科学を探究するには、目的、到達点だけでなく、その過程も大事にされる必要があると思う。それは「早く高く」だけを至上とする価値観では到達できない。人間としての営み・喜び「パートナーを持ち子供を生み育てる」をはじめ、「道端の草花を愛で景色を楽しみながら」いくというのを当然とする価値観への転換が必要ではないか。何日も子供と顔を合わすことができず子供に顔を忘れられてしまうのではないか、などという不安を持つほど、日本の今の多くの男性は忙しく、「生み育てる」ことの楽しさから疎外されている。また、「早く、高く」という研究のプレッシャーと、家事・育児の負担をより多く女性に期待する風潮の中で、若い女性研究者が研究を続けようとする、結婚はできず子供も持てずという状況になってしまうのも疎外された状況といえる。

ところで、「高く、早く」の価値観が主流である世界に暮らしつつ、研究しなおかつ家庭や趣味のための時間を生み出すには、いかに効率的に研究するか、ということが問題であろう。いろいろ考えてみるがこれにはまだ私としての結論が出ない。私の知るヨーロッパの研究者の生活は研究一辺倒ではない。家族との時間、音楽などの趣味の時間、旅行の時間（長い休暇）もとっている。かつ、私よりもたくさんの論文を出している（のではないか）。これがどうして可能なのか。彼らの大学教官としての教育のデューティーは決して少なくはない。違うのは、研究補助者が多く、会議などが少ない点がある。また英語力の差と、それに密接に関連しているが同じではない発表能力、宣伝力の差がかなりある気がする。論文を読んだ

り、書いたりに必要な時間がかかなり違う。国際学会での発表や講演を聞いて得られる情報の歩留まりも相当違う気がする。そこを乗り越えるには常日頃から英語を使いなれる長い訓練がある。この訓練をした次の世代こそ、この余裕を生み出せるのではないかと期待する。

私は昨年4月以来、生理学会の男女共同参画推進委員会の委員長として生理学会における男女共同参画を進める活動をおこなって来た。この間、「早く、高く」の世界の中で、産休・育休で休まれては困る、ポジションが少ない中で有能な男性が職を得る機会が減ってしまうのではないか、などの問いかけがあった。同じ思いを多くの人が持っていると思う。しかし、十分に能力を備えた女性研究者及びその予備軍（学生）がかかなり存在しており、彼女たちが出産・育児の数年間のために研究社会から排除されてしまうのは、女性研究者にとってつらいことであるばかりでなく、社会にとっても大いなる損失である。男女が共同で家事・育児を分担するようになれば、そしてそれをサポートする仕組みができれば、この損失を止めることができる。そして、男性も疎外された状況から回復できる。男女がお互いに尊重しあい、人間としての営み・喜び「家庭を維持し子供を生み育てること」を男女共同でわかちあうことを当然とする価値観への転換が、男女共同参画には必要である。しかし一方で、多くの人の周りに、子供の世話や介護をしなければならない人が存在すれば、研究生活が自然とそういう人を考慮に入れたものになると思う。つまり男女共同参画の努力をする過程で、次第に価値観の転換が生じていくのではないか、というのが私の期待である。長い道のりが予想されるが、どこまで突き進むかわからない競走社会への歯止めにもなるのではないかと、思う。